

# わが人生、わが研究 ジヨレス・メドベージュフ大いに語る

翻訳手 佐々木洋  
*Zhores A. Medvedev / Yo Sasaki*

“マルクスはあちらですよ”

——「」の度は急なお願いにもかかわらず、「」のインターネットに快く応じてくださり大変ありがとうございます。しかも博士の「自宅の書斎にお招きいただき、感激している次第です。今回お邪魔しました直接の目的は、私が来春に北海道大学図書刊行会から日本語版を出そうと計画中の博士の大著『ソビエト農業』についてお訊ねすることですが、あわせて『季刊窓』の編集部からも、いろいろ伺つてほしいと託されて参りました。私はロシア語が話せません。下手な英語で質問しますが、「」寛容のほどよろしくお願ひします。

よくいらっしゃいました。ロンドンの印象はいかがですか？「」のふるい冷涼な毎日が続いていますから、びっくりしたでしょう。



——涼しいというか、寒くて驚いています。実は先ほど、「こちらのミル・ヒル駅（地下鉄南北線の終点）に来る前に、以前、留学中に世話をなった下宿先に近いタフネル・パーク駅で降りて、ハイゲートのマルクスの墓地まで散歩に行つてきました。しばらくぶりでしたのでちょっと公園の案内図で方向を確かめようとすると、花壇にジョウロで水をさしてた初老の紳士が「カール・マルクスなら、この道を三百米行けば左側に墓地の入り口を見つけられますよ」と教えてくれるんですね。地元の人たちは日本人と見れば必ずマルクスの墓を探すと思うはずだ」とよく聞いていましたのでなるほどと思いました。

●墓参者もめつきり減  
いや、それは日本人に限らないですよ。われわれが最近、友人を案内して彼の墓地に行つた時も、やはり地元の方が問わず語りに「カール・マルクスはあちらですよ」と教えてくれましてね。要するにあの近くで歩いている地元以外の人はほとんどマルクスに会いに行く人なんでしょう。もつとも近頃は墓参者もめつきり減つているようですが。

### 最近のロシアを訪ねて

——今朝のマルクスは旧ソ連兵の激寒期用の帽子をかぶせられていて、管理人のおばさんが長い棒でそれを払おうとしていました。彼女ではどうもうまくそれないので、結局私が棒を借りて手伝うはめになつたのですが、こうした新手のいたずらと、依然絶えない墓前の献花との同居に、ベルリンの壁崩壊以降の現代の一面を感じた次第です。

それでは早速、最初の質問をさせて下さい。博士は最近、七八月に五週間ほど母国を訪れたようですが、今回のロシア旅行をとおして、旧ソ連諸国の現在の政治的・経済的状態をどう見て

おられるか、お聞かせ願えませんか？

今回のロシア訪問はきわめて有意義なものでした。私は弟のロイや息子や孫娘に会つて彼らの様子がよくわかりましたし、妻も多くの親戚や友人を訪ねることができました。それに私は滞在中にいくつも研究プロジェクトを行つてきました。なかでも最重要のものは原子力エネルギー問題です。次に民営化問題ですが、すでに民営化されているのは小規模な商・工業企業と集団農場です。そこで私は民営化の進展のモデルとも言われるニジノ・ノブゴロド（注=旧ゴーリキーはこの旧名に先祖返りした）で開かれた原子力の安全をめぐる国際会議に出ました。私は第一線の科学者と打ち合わせて今後の研究計画をつくりました。また、私はニジノ・ノブゴロドの各地区や地方団体の各級議長や専門職に会いました。モスクワは万事がお役所的ですので、各地域レベルの民営化の実状を取材しようにも無理なのです。そこで地方紙を読み、さまざまな工場の各グループを訪ね、ロシアの人びとが民営化計画から得たものを探ろうとしました。

調査結果を私は二編の論文にしましたが、興味深いのは原発の建設計画によつやく安全性や設計法に多くの改善が盛り込まれ始めたことです。ロシアで衰退していない唯一の分野が原子力発電です。反対に民営化計画は今年が最終年度で、私も目下さまざまな資料にあたっていますが、今の私の判断では大失敗です。庶民の生活水準の向上には実際、何の成果もあげておらず、富の配分を変えはしても、生活の質的向上にはなつていません。

——その結論は農業の部面にもあてはまるのですか？

必ずしもそうではありません。それは農業が政治動向より気象条件に左右されるからで

●民営化は失敗したが、農業は盛る

す。世界的な異常気象のなかで今年のロシアは好天と豊作で、しかもここ一両年の食糧不足で人びとが自家菜園に精を出し始めました。農村では普通の住民は集団農場と収穫期や農閑期に働く契約を結びます。他の共和国からの難民や軍除隊者は農地のある場所に落ち着きます。農業に眞面目に取む組む人が増えたのです。これまで農業は軽視され、蔑まれた仕事でした。技術者、科学者、医者、教員などが特典ある仕事とされ、農業はさしづめ最低ランクの仕事でした。それが近年の食糧不足で、人びとはようやく農業の優越性に気づきました。農業従事者は今や、脚光を浴び、名譽ある社会的地位を享受し始めています。農産物価格が自由化され、彼らの所得は向上しました。最近は都市からの出戻り組が増え、往年の村々の甦るさまや、廃墟の村々を新たに受け継ぐさまもみられて、総じて農村人口が増加しています。また、モスクワなどの大都市周辺ではダーチャ（家庭菜園）ばかりか、農業部門を支える基盤整備向け施設に投資する人びとも増えています。こうして農村住民のなかには現在、非常に大きな社会的特典を受けはじめた人びとも出てきています。

### なぜ農業問題に取りくんだか

——旧ソ連社会がなかなか再生の糸口を掴めない、と伝えられるなかで、もしも「指摘のようなロシア農村の新しい動きが定着していくば、それは歴史的にも計り知れない重要な意味を持つと思います。それにこの点は博士の『ソビエト農業』の結論的な展望でもあったわけですね。序文で、この本は博士が生涯をつづじて闘わっているソビエト農業と遺伝学の諸問題に関する研究と検

討の集大成をなす、と述べておられます。同時に博士は、この本がソビエト関係の専門家の範囲を越えて、もっと一般の読者層、とりわけ大地と自然を慈しむ人びとに受容されることを切望しております。そこで伺いたいのは、遺伝学から政治や文学に及ぶレパートリーをもつ博士が、旧ソ連農業の諸問題を包括的・体系的に問うような大著の、しかも多年を要する執筆に取りかかった主たる動機は何でしたか？

#### ●対ルイセンコ闘争として

当著が長年農業問題研究の集大成であることにには、やや説明を要します。私はチミリアゼフ農科大学を卒業し、そこで学究生活に入りました。ソ連農業は長年ルイセンコの影響下にありました。時の政治が彼を支持しましたからそれに与みしない生物学者・遺伝学者はもちろん、農芸化学労働者にさえ困難が降りかかりました。これがもとで私は対ルイセンコ闘争を開始し、彼を攻撃する論文を書きましたから、そこに長く留まりえませんでした。かくて当初はルイセンコこそ主要な障害であると考えたのです。彼のエセ科学的な考えがソビエト生物学に君臨し、農業遺伝学者や自然淘汰論者が追放されました。われわれが収穫や施肥その他の改善の研究をしても、何ら聞く耳をもたず、逆にどんなインチキな方法でも学問の政治支配がそれを実行せしめ、かくて現実の農業を恐ろしく損なったのです。したがつて私の最初の発想はルイセンコを主題に書くことであり、これは私にとつてはごく自然な決断でした。ルイセンコの妄想の批判に挑んだ科学者は他にもいく人いますが、私が専念したのは、彼が自身の地位を手中に握るまでの歴史と、フルシチョフ時代に彼が反対派科学者を弾圧したやり方でした。私の処女作はタンパク質の生合成に関してでしたから、『ルイセンコ学説の興亡』は二番目です。後者の英語版は改訂版というべ

きで、実は原著はサミズダート、つまり地下で回し読みをしたものでした。ところであなたは『ルイセンコ論争』のこのペーパーバックの英語版をご覧になつてますか？

——いや、私がもつてるのはハードカバーです。

このほうが新しくて、しかも原著による完全版です。）存じでしようが、英語版ハードカバーでは、翻訳者のラーナー博士が原著を圧縮し、実証資料に関する諸章、特に農業関係章を削除してしまい、また生物学、遺伝学、農学に関する論争も無視しました。

——その経緯は、日本語版の訳者のあとがきでも紹介があるので私も存じています。

●農業「そが社会の基盤」

こうして一九六一年がその後に私の身にふりかかった諸問題の発端となりました。結局、私は農科大学を辞し、担当分野も変わって放射線生物学になりましたが、私の農業関心はずつと強く持ち続けてきました。どんな社会でも農業が最重要的仕事であり、次の世代からも、また他産業からも農業こそが社会の基盤などと実感してきたからです。ロシアではことに農業が大事です。もっとも私自身は農学の実践には従事したことはありませんが、

私が著作の執筆を思い立ったのは、往年の世界最大の穀物輸出国が、こともあり世界最大の輸入国に転落しようとした一九八〇年に、英國の学者と米国のモスクワ特派員が、ソ連農業が自国民への食糧供給に失敗した理由、ソ連が穀物の大量輸入を不可欠とする理由を訊ねてきた時でした、これは是が非でも解明する義務があると痛感したのです。私はまたかねてから環境問題も重視していましたから、その見地からもソ連農業の功罪を考察しようと思つたわけです。それに、西側出版物は皆、ソ連の農業問題の理解が的外れであることに落胆し、それを正す責任を感じたことも重要な動機でした。

### ●科学者としての私の課題

私が何をおいても、一科学者として真っ先にやるべき課題は、集団化がどれだけのコルホーズ農民を犠牲にしたかを示すことでした。それは革命の前も後も国民の過半を占めていた農民こそが、知識人や軍人など他のどんな社会集団よりも甚大な被害にあつた事実を示したかったのです。ソ連では誰も、自身の集団こそが一番酷い目にあつたと主張したがりますが、私は農民をおいてそれがないことを歴然とさせたかったです。

次の課題として、集団化の欠陥や誤りばかりでなく、何をどうすべきであったかをも抉り出し、いくつの提言を示そうとしました。どの章でも現実に演じられた事態にとどまらず、物事をどう打開しらるかをも示唆しようとしました。ソ連農業に関する英・米の書物は、心情や意図も不明なままにいわば外側から、ただ批判的にものごとを叙述しているだけであるのにたいして、私の場合は問題の打開策の解明にも努めたわけです。

この『ソビエト農業』にはどちらかというと学術書の硬さがあつて、書名や統計表や索引欄からも一般の読者には多少とつづきにくい印象がありますから、『ルイセンコ論争』は九ないし一〇もの外国語版が出たのに、当著はこれまで翻訳の話はありません。それでも自身では非常に重要な労作と考えますから、あなたの翻訳計画を聞いて、私の気持ちが通じたことに大変うれしく思います。恐らく出版社も同じでしょう。実は翻訳版が出ないのは出版社のノートン側の責任もあるのです。西側では出版はビジネスですから、広告や翻訳者の確保や書評の手配に出版社がどう取り組むかで、売れ行きも左右されます。この点ロイと私は何冊も刊行したのでよくわかるのですが、本書の場合、ノートンはただ取次店に刊行予定リストを配つただけで何の販売促進活動もしていません。なぜかというと、

同社から同じ一九八七年に刊行された『ライス・ダイエット（米食）』が、米国では爆発的なベストセラーとなり、その営業にてんてこ舞いで、本書まで頭が廻らなかつたのです。ご承知のように米国では脂肪の取りすぎが深刻な健康問題になり、日本食への関心が高まつて、ピーク時には『ライス・ダイエット』は週に二万五〇〇〇部も売れたと言いますね。

## 農業再建への道

――この本のなかで博士は「農業は今なお人間存在の基礎である」、今後もそうあり続ける、「農業はそのものからして気候と環境と人間社会との絆からなる」、「農業が生態学的な均衡を欠く場合、責めを負うべきは人間の側であって、自然でない」と指摘されました。そして、西側では最も活力のある有能で献身的な農民が大地に踏み留まつたのと対照的に、ソ連で任意に農業に居残つたのは最も当事者能力を欠いた、受け身で、高齢の人ひとであり、他の残留者は離村しようにもできなかつた層であつて、結局、集団化が、大地に執着する農民の特性や心理や伝統を根絶してしまつたのだ、と述べておられます。したがつて博士の主張は、家族単位を基盤とする農業経営の再生可能性を追求し、それによって人びとがからだで実感できるような大地との絆を取り戻すには、大地の私的な帰属をつうじて個人責任性を育くむ以外にない、というものでした。ゴルバチョフ改革の行き詰まりと旧ソ連の解体という歴史の現実が、博士のかねての指摘の方向に動き出しているように見えます。現時点にたつて旧ソ連の農業の再建過程をどう見になりますか？

農業再編過程を考察する場合に想起される問題は、帝政ロシアも、またスターリン期で

## ● 性急すぎる改革

あれフルシチョフ期であれ、特に旧ソ連は絶えず農業再建のための緊急の時間表作成に追われ、いつもこれ以上ないほどの性急さであらゆるものを作り替えようと欲してきたことです。今取り組んでいるのが市場改革です。エリツィンの農業改革は一九九二年のわずか一年間以内に集団農場制度から私営農場への転換しようと始めたものです。人びとに手本を示し、手取り足取りして、彼らの天性を育むには時間がかかります。一年やそこらではとうてい不可能です。人びとに無理強いするのではなく、学び直そうと誘いかける仕組みの事業は一步一歩でしか進みようがない。ところがエリツィンは集団農場の即刻解体・絶滅に挑んで、どうやら名称だけは以前と異なる登記をすることに成功しました。それでも現在、コルホーズやソフホーズは別の農場名で強固に存続しています。二五万もの私的な個人農や集団農場が誕生ましたが、社会的な施設やサービスの欠如からその経営は軌道に乗つていません。それに憲法上の規定や該当法令を欠き、エリツィン政府が肝心要の決断を何ら下さないなかで、土地の私的所有化をどう進めるかで多くのトラブルがあります。

● 開発すべき独自の方  
式

こうしてすべてが今にも壊れそうで、私有制度への転換は非常に不安定です。それでも家族や有志集団を基盤とした私的農業が現れて、農業においても「混合経済」が必然となりました。うまくいっているコルホーズやソフホーズは潰そとも潰れません。英・米その他でもソ連の集団型農場並の大農場がありますね。ですからことにシベリア・ウラル・北西部でのよくな厳しい気象条件のゆえに、農村事情が西欧と根本的に異なるロシアでは結局、一種の複合的制度を要するのです。ロシアの村落構造を西側と比べますと、後者に

おける散居制にたいして、厳しい気候と非常に粗末な道路事情のために人びとは住居を近接させて相互に助け合うことが不可欠でした。従来、こうして一定の共同体制度が正当化されてきたのです。したがって今後の私的で個人的な農場も、特に冬期にはかなりの範囲まで公共的施設に依存して相互に協力して活動する必要があります。今日では学校・病院などの社会施設のないような革命前の原始的な制度に戻ることは不可能です。われわれはおよそ複製のできない、新たな種類の制度を発展させなければなりません。ロシアの指導者は誰も彼も米国やカナダの経験を模倣したがるのですが、彼らは自分自身の方式を開発すべきなのです。

——自分自身の開発方式という最後の点は農業の再建にとどまりえませんね。

まさしくそうです。『ソビエト農業』の第九章「機械化と化学化」の結語でも閲説しましたが、結局、ソ連經濟の根幹をなす農工複合体の全体、すなわち計画機関・農畜産物加工業・農業機械補給局・集団／国営農場・土地整理機関・建設作業機関、これら全体の最も重要な構成員は、本来、圃場で働く農民男女のはずなのです。ところが実はこれらの農民こそ体制全体のなかで、一番無力な成員のまま放置されてきました。働く人びとの協同が適切に組織される体制であれば、当然に主人公となり、中心人物となつてその他の支援者・協力者・助言者からの多様なサービスを享受できて然るべき成員が、実際には最も従属的な立場に放つて置かれてきたことが、他ならぬ旧ソ連社会の最大の問題であったわけです。この点を見据えないと出来合いのモデルを模倣しようとしてもだめなのです。

## 個人的経験と政治的経験

——まだ伺いたいのですが別の質問に移ります。今度は私というより日本の読者の知りたい質問です。博士は日本ではふたつの顔をもっています。左翼活動家や研究者にとっては博士は『ルイ・センコ学説の興亡』や『ソルジエニーヴィンの闘い』の著者であり、『共産主義とは何か』の著者であるロイ・メドベージェフとの双子の兄弟です。他方で『日本経済新聞』の読者には、博士は、部外者が実状を覗けない旧ソ連の政治的難問をインサイダーの目からクリアーに解説してくれる定評のある寄稿者です。実はこの二つの読者層は余り重なりません。最近知ったのですが、日経新聞の博士の肩書きが「作家兼生物学者」に変わりましたが、何故でしょうか？

一九九一年九月に医学研究所を定年になり、フリーランサーになつたからです。英語では作家とは本や論文を書く人のことですが、私の場合、小説は書きません。

——『ソビエト農業』で、博士が農科大学に進学した経緯、ルイセンコ論争の後にソ連政治に関心を移した理由、あるいは父上がマガダンの矯正収容所農場で亡くなられたことなどを新たに知りましたが、日本の読者が知っている博士の経歴はなお断片的です。差し支えなければ、出生地やご両親の博士やロイへの影響、従軍中の怪我、農科大学を離職した理由、フレジネフによる市民権剥奪、共産党との関係などについてお話ください。

私とロイとの双子は一九二五年にグルジアの首都トビリシで生まれましたが、当地は出生地という以上の関係はありませんでした。家族はすぐ翌年レニングラードに移り、一九三八年にモスクワに転居するまでそこにいました。父アレクサンドルはロシア人でした。

彼は哲学者であるとともに歴史家でもあり、軍の大尉の教授を務めていました。

——母上は音楽家であったと伺つておりましたが。

そうです。母ユリアはチェロ奏者で、ユダヤ人でした。母の姉妹にはピアニストもいました。ここにロストロボービッチの写真がありますが、彼らはごく近しい音楽家仲間で、私も個人的に大変親しく交際してきました。母のコンサートが近づくと大変で、家のなかでも同じ曲を何回も何回も繰り返し練習するので、音楽が騒音にしか聞こえなかつたことを想ひ起こします。父は逮捕されて不在でしたから、母の影響は大きいと思います。

——父上の逮捕はご存じだったのですか？

それははつきり覚えていて、一九三八年八月二十四日でした。当時はまだ一三歳で、以後一度も父に会つていません。父は一九四〇年に極東のマガダン地方の銅の鉱山労働に送られて極度に健康を害した後に、矯正労働国営農場に移されてそこで死にました。このことは『ソビエト農業』で書いたように、私の学友の父親が、同じ監獄農場に送られ、生き残つて息子に私の父のことを話したことから偶然知つたのです。私は小さい頃から生物学に興味を持っていたので父の影響は大きくなかったと思いますが、ロイのほうは恐らく早くから父の書斎の書物を読んでいたらしく、それゆえ彼は父親の影響を多分に受けて歴史家になったと思います。父の逮捕で軍アカデミーのアパートを失つたのでモスクワ滞在は結局一年だけで、家族はドン河畔ロストフに移り、ドイツ軍の侵入後、戦時中はトビリシに戻っています。そこで私は一九四三年二月に徴兵されました。一七歳の一兵卒です。そして北カフカースのクバンでドイツ軍の銃撃によつて足を被弾したのです。当初は杖な

しには歩行ができませんでしたが、後日やつと抗生素質の投与と種々の治療でどうやら歩けるようになりました。傷痍軍人として一九四四年に退院したとき、すべての大学の門が開かれていましたが、私は暖かい人間的要素に惹かれて前述した農科大学に進みました。退役軍人としてのみか傷痍軍人としても、学生時代は私は年金生活者でした。

——博士は一九四四年に農業アカデミーに入学され、四六年からそこのスタッフとして学究生活に入られましたが、そのアカデミーが「ルイセンコ論争」の一方の牙城だったわけですね。博士は一九六二年に農科大学を離れ、同年に大学が閉鎖されたようですが。

農業アカデミーは一八九〇年と一九六二年と、二度も閉鎖を命じられました。いずれも権力による学問支配に屈服しなかつたからです。私が医学研究所に移った理由はアカデミーの閉鎖というより、前述したように私の『ルイセンコ論争』の原稿のせいです。

——博士が一九七三年にフレジネフによつて国外追放された理由や、現在の市民権、それにソ連共産党への所属の有無などについてお聞きしたいのですが？

私は追放されたのではなく、英國の研究所に招かれ、当地滞在中にソ連市民権を剥奪され、帰國不能になつたのです。理由は明白で、刑法のいう「反ソ連活動」を犯したというものです。英國政府は市民権を、医学研究所はポストを私に与えました。現在、私はロシア市民権を回復していますが、英國政府は私が保持している英國市民権をまったく意に介さないようです。旧ソ連共産党の件ですが、私には入党経験はありません。ただし弟のロイは一九四六年に入党し、一九六九年に除名されています。彼はソ連最高會議で名誉回復措置のなされた一九八九年に再入党しましたが、その後党が解体されてロイは党員でなくな

#### ●帰國不能へ

#### ●父の影響

りました。現在は党が再建されていますが、それにはロイは加わっておりません。

## ロイ・メドベージュとの非公式回路

——海外の研究者や観察者にとって外部からソビエト社会を理解することは非常に困難で、われわれの知見が的外れであることが少なくありません。ですから、ソ連社会の多様な側面と過程を浮かび上がらせる博士とロイとの一連の労作は、われわれがソ連社会をさまざまな角度から考察するうえで非常に有益なものでした。博士とロイとがそれぞれ独立した学者であることは承知しておりますが、お二人のそれぞれにとって、両者の協同もまた特別に重要な意味があると考えています。『ソビエト農業』の場合でも博士は、謝辞の冒頭でロイの支援を称えておられますね。私どもは博士の帰国禁止後の厳しい条件下でお二人がどのように密接な協同と意見交流とを維持されたかに大変興味があります。私の領域に立入るのは恐縮ですが、差し支えない範囲でお話くださるとうれしいのですが。

いや、それほど私的な問題とは考えません。一九七〇年代と八〇年代、具体的には一九八七年まで、ロイは一定の拘束を受けていました。一九八六年の末にサハロフが監禁を解かれた後にやつと、政治的空気が若干変わり始めました。一九八七年には検閲制度が緩和され、八八年はそれが最終的に廃止された年です。それまでロイは西側向けに少々は書いていましたが、ソ連国内で彼の最初の論文が公刊されたのは、やつと一九八八年になつてのことです。しかも初めは大きな全国紙でなく小さな地方紙でのことでした。

ですから一九七三年から一九八八年まで、二人は一種の非公式の連絡回路を設けており

ました。この回路をつうじてロイは私に執筆中の著作の草稿を送つてきて、私は草稿にたいする論評、多くの文献類を送り返し、また彼は無収入でしたから家計支援もしました。また、通常の郵送も可能でしたから、たとえば普通の用紙から始まつて良質のカーボン紙とかタイプライターに至るまで、不足を訴えるのものは何でも普通小包便で郵送しました。

——博士自身が直接にロイに郵送されたんでしょうか？

しました。それに荷物を使ひに託したこともあります。例えば米国人が「旅行の際ロイに会えるはずなので紹介してほしい」と電話が来るとすると、私は「何か運んでくれる場合に限り、紹介状を書きます」と応じ、こうして内緒の連絡網を設けました。妻も毎年ロシアに旅行する際には、息子その他への荷物を集めました。ただし、ロイへの草稿などを彼女に託したことではありません。妻に託していたのはいつもお金です。しかし、これらとは別の秘密の絆も設けていました。ロイとの率直な議論、草稿や文献その他の重要な資料の交換には、外国、特に米・英の特派員の支援する回路を利用してきました。米国の特派員団は外交特権を使える唯一のジャーナリスト集団で、英國の特派員はそうした特権行使できませんでした。モスクワでは、英國大使館と違つて米国大使館は同国ジャーナリストにたいして本国との通信連絡用に外交特権郵便の使用を許していましたのですね。

——実際にどうやって特派員に外交郵便を使うよう頼んだのでしょうか？

ジャーナリストが外交郵便制度を利用できる国際協定はありませんが、米国政府はこれを無視して同国特派員にこの外交特権付きの郵便袋の使用を認めていました。そして米国ジャーナリストは旧ソ連における異端派その他の集団のなかでの政治生活がどう展開して

いるかに非常に関心が強かつたのです。

——そうすると博士やロイの荷物を特派員に託したのですか？

違います。たとえば、ここにロイの英語版『歴史の審判の前に』がありますね。もし私がこの本をロイに送りたいと思えば、それを同封の住所に、「在ヘルシンキ・米国大使館気付『ニューヨーク・タイムズ』モクスワ支局長ヘンドリック・スミス記者殿」と書いて、モスクワでなくヘルシンキ宛に郵送するのです。スミス記者はあなたも「存知でしよう。ヘルシンキの大使館は外交特権郵便をスミス記者に発送します。私からの別便でそれがロイ宛であることをすでに知っていますから、スミス記者は郵便物を無事にロイに届けてくれるわけです。こうして私は米国の外交特権を利用することができますのですが、それというのも、当時、つまり一九七〇年代初頭から八〇年代初めには、旧ソ連関係専門の米国ジャーナリストは、ロイやサハロフやソルジェニーツイン、あるいはユダヤ人活動家その他の異端派との緊密な連絡を維持することに大いに腐心していたからです。

ロイへ通常の私信もよく出しましたが、それが紛失した例は記憶にありません。私信はもっぱら「何か郵送してほしい」などの用件だけで、草稿や政治的覚書の郵送はしませんでした。私も旧ソ連内部の政治展開を叙述していた関係で、当地の政治的事件やその展開の真相を知るのは重要でしたから、やはり外交郵便の回路をつうじてロイから資料や書簡を受け取りましたが、この場合、オーストリアとフィンランド経由が主でした。それらの資料には異端派やその他の人物に関わる非常に興味深い政治的展開が盛り込まれていて、ゆえに私は非公式な回路を維持しながら、ソ連内部の政治的、経済的その他の分野の論議

に精通することができたわけです。ただしロイが自宅監禁され、誰もが彼との個人的接触を断たれていた一九八四～八五年には、この回路を維持するのはまさに至難の業でした。

## ソルジェニーツインになにが起こったか

——大変スリリングなお話をありがとうございました。旧ソ連社会の再生を目指した反体制運動の良心を代表する知識人として、私どもはサハロフやメドベージエフ兄弟をすぐに思い浮かべるのですが、『収容所群島』や『イワン・デニソビッチの一日』を読んで現存社会主義の問題を開眼した読者も少なくありません。実は私も二〇年ほど前に、全学連や大学生協連の学生に頼まれて支笏湖サマーキャンプで「ソルジェニーツインの文学とメドベージエフの歴史学」という講演をしましたが、その際のタネ本の一つが、博士の著書『ソルジェニーツインの闘い』でした。出国前のソルジェニーツインと博士の密接な関係を知る読者は、最近のお二人の交流にも関心があると思うのですが。

### ●ソルジェニーツインの変貌

彼が国外に追放される以前のわれわれの関係は良好でした。私がまだロシアにいた頃は、ソルジェニーツインは私にいろいろ注文てきて、私もさまざま方法で彼を支援しました。一九七四年の西独追放とチューリッヒへの移住後に彼に何かが起こったのです。驚いたことに、一番近しい仲間の中心人物のパニオンのような旧友が連絡をとつて訪ねようとしたのに、彼は会いませんでした。ロストロポービツチも彼の旧友ですが、出国してパリに着いた直後に、彼はソルジェニーツインに相談にのつてもらえたと思っていましたら、彼が

四年一月『タイム』誌の会見でソルジエニーツィンは、メドベージエフ兄弟が、あたかもものわからぬ新世代の指導者の育つまで反対派は遅い待つよう提案したかのように非難した。この非難が当たらないことは、帰国を阻まれたジョレスの、また除名・失職させられたロイの変わらぬ健

弟が、あたかもものわからぬ新世代の指導者の育つまで反対派は遅い待つよう提案したかのように非難した。この非難が当たらないことは、帰国を阻まれたジョレスの、また除名・失職させられたロイの変わらぬ健

話すことを拒んで、奥さんしか電話に出なかつたと、ぼやいていました。彼がなぜ西側在住の親友に会いたがらないのか当初は理解できませんでした。私がチューリッヒに近いドイツに旅した際、一目会いたいし、西側での生活のノウハウなどでお役にも立てる、と手紙を書くと、「アレクサンドロビッチ、私は多忙で、執筆に専念しようと決めた。私の直接の仕事以外では誰にも会えないし、話もできない」とごく短い返事をくれただけで、その後は何の音沙汰もありません。まったく奇妙なことでした。彼が『仔牛が檻の木に角突いた』の英語版を出した時に、その付録で私にいわれのない非難を書きました。<sup>\*</sup>私が出版社に照会すると、同社から大変申し訳ないことをしたとの返事が来ていましたが。

彼は隠遁者になつていて、古い知故の誰とも会いません。彼は何でも事前に計画を立て、非常に特異な人物だと思います。従来、私の著書ではあえて触れなかつたことですが、彼には幾つものエピソードがあります。たとえばあなたが私に会見したいとしますと、電話で「ジョレスさんに会見したいのですが」と言いますね。私は「結構です。自宅に会いに来なさい」というでしょう。そこであなたがわが家に来て腰掛けようとすると、「さあ、会見を始めましょう。私の方であなたの質問を用意済みです」。これがソルジエニーツィンが会見に応ずるいつもの方法です。外国特派員が会見を求めてくる場合は、彼は自身で自らが聞かせたい設問を幾つか用意し、「さあ、このなかから二つの質問を選びなさい。二つ以上はダメですよ」というわけです。まるで小説同様にインタビュアの質問も回答も書きます。これが彼のスタイルで、彼はすべてを設計します。彼は自分の国外追放をもまた自らプログラムしたと思います。彼が追放されるように期待してKGBその他を操ろう

とした事件を見ればわかるはずです。つまり最後に彼は、自分が国外に追放される形で、西側に来ようと決断しました。ところが西側の現実を知つて落胆し、彼は失意の人となつたのです。

あなたとの会見に必須とはいませんが、ソルジエニーツィンに関する事態の発展がきわめて興味深いものですので、もう少し説明しましょう。彼は北欧に住みたかったです。彼の人生設計では移住先にはチューリッヒやバーモントでなくノルウェーを希望していました。北欧の景色・気候・環境、広大な土地や大きな家を見て周り、ノーベル賞受賞者としてスウェーデンに近いノルウェーを選んで、住居も用意しました。ところが彼が突然わかつたことは、『収容所群島』の印税收入に対する税率の異常な高さでした。むろん以前から彼は他の小説の印税に課税されていますが、一大収入源となる『収容所群島』の数百万ドルの印税にたいし、ノルウェー・スウェーデン・スイスのどの国でも、なんと七八〇%も政府に納税義務のあることに突如、気がついたのです。これには極度に狼狽しました。自由の国にきたつもりでしたから大変なショックでした。ポルノグラフィーその他の多くの事情もショックでした。国税のほか地方税も請求されたスイスで、彼は獄中のソ連市民への慈善寄付の免税措置を申し出ると、当局は免税措置はスイス国内の慈善事業を利用できるだけだと断られ、そこで彼は税金を払わず、米国にこつそり逃げだして、一九七六年にバーモントに住みました。スイス当局が支払いを要求すると、彼は「スイス人は悪党だ」と告訴し、これにたいして当局が彼の銀行口座を差し押されたので、長い間金銭関係の係争が続いたわけです。彼には当初描いたイメージとまったく異なる西側社会が耐

● 隠遁者になります

ソルジエニーツィン

え難くなつてきました。彼は沢山の個人的問題も抱えています。そこで彼は誰とも会つたり、話したくなくなつて、自分は隠遁者であり、何事も自分とは無関係で、税金問題にも関わりがない、といったイメージを造り上げて、まさに一切を無視してかかつたのです。彼は隠遁者になつて、西側の生活を知つたり、考えようとしたしませんが、これはまさしく人生の事柄すべてを回避しようとするもので、不自然さが感じられます。したがつて、彼の長編『赤い車輪』の最新作『一九一七年四月』も大変読みづらくて、率直に言つてがつかりしています。

## 日本への興味

——『収容所群島』の著者の内面の世界を、誰よりも良く「存知の博士のソルジエニーヴィン評」だけに興味深いものでした。残念ながら、もう相当な時間を費やしておりますので最後の質問に移らせていただきます。以前、窓社が刊行した『過労死』をお送りした時に、博士は「私は定年退職した身だから、この症候群を患う危険は何もない」とお返事くださいました。日本ではこの症候群が重要な社会問題になつています。人の老いとか、寿命という問題も博士の重要な研究対象と伺つてますので、それに関説しながら、『季刊窓』をとおして日本の読者に何かメッセージをお寄せくださるとうれしいのですが。

●自分自身をオーガナ  
イズする

私は遺伝学者、生物学者、また農学者ですので、私は自分自身を用意周到にオーガナイズするタイプの人間です。生物学・老人学・老化研究には少年時代から興味を持ち始めました。

●最後の出版計画?

した。これまで何冊も学術書を出しましたが、その一つがタンパクの生合成と加齢の問題で、他に老人学の問題の著作もありまして、両者とも英語版が出ています。他の分野でもある時、 Chernobyl やウラルの核事故に関心を持ち、本を出したことがあります。私の永遠の主題はやはり加齢・老化でして、次のというか、ひょっとすると私の最後の（笑い）刊行計画になるかもしねるのは「老化と長寿」でしょう。こここの医学研究所の研究課題の大半も老化、遺伝、あるいは老化の分子生物学でして、研究所が私を招聘した理由もそこにありました。私が主要に貢献した分野は分子遺伝学的方法からの老化研究ですが、長寿にもまた関心があります。私は発達と異なる老化の分野における生命の第二の原理も踏まえていますから、たえずこの原理を念頭において、私自身に非常に厳格な自己統治を課し、そのための一時懸命に働きます。私は規則正しく運動しますが、カーテー・クリントン大統領のようなジョギングを好まないのは、それが不自然なエネルギー消費だからです。私が好むのは庭いじりや煙突の防火壁づくりなどのごく自然の運動ですが、これは身体的にも有益なタイプの活動のはずです。私は科学者として一定の自主ルールに忠実で、けつしてダイエットをせず、また、良質の蛋白・ビタミン・澱粉などの栄養素を適度のバランスをもつた食生活を堅持していますので、この三〇年間も体重は不变ですし、同一の肉体的諸条件を維持しています。また身体の働きの基本的なパラメーターを管理していますから、多分二〇年前と同じ位に丈夫です。それは私が運動し、体重を一定に保ち、旅行で環境が変わつても同じライフスタイルを堅持するからです。ですから私の生産性の高さはけつして過労によるものではありません。働くなら生産的でありたい。私はやろうと

すれば他の人びとより短時間の内により多くの仕事ができます。これが私の原理です。

——本日は本当に長時間ありがとうございました。私がお邪魔したことでお仕事や庭いじりの支障になつたのでないかと恐縮しております。

実は昼食前に研究所に行つて、少し仕事をしてきました。あなたの来訪で失つたのは午睡だけです。通常は私は昼食後に昼寝をしますが、それは、ちょっとでも午睡をとれば夜の睡眠時間が短くて済むからです。

また私は生活全体の経済にも努めます。たとえば私が研究所に赴任した頃、家の買い方で多くの助言がありました。大方の同僚の住居はロンドンの遠方です。彼らは郊外のよリ安くて広い住宅が好きですが、毎日の通勤が大変です。私と妻とが研究所付近を散策して見つけたのは通勤が徒歩で二〇分の住宅です。ここに住むのは職場に近いというだけです。地下鉄もバスも要らず、毎朝徒歩で出て、昼食には戻りますから、時も金も節約でき、ストレスとも無縁です。モスクワにいた時分もほとんど似ていました。問題は、狭くて融通のないこの家を妻が好きでないことです。しかし付近の全家屋は同じ造りです。多少違う家はどこか他で探す他ありません。よつて私は他のどの案にも強く抵抗し、職住近接だけを主張しました。これが生産性の一部として、私はこれらの単純な原理を追求します。

趣味のことですが、一般に人々は趣味や特技を楽しめますね。私の場合、最大の喜びは自分自身で選んだ主題で何か面白いことを書くことです。ですから誰かが私に「何か書いて下さい」と言っても、普段は「それは私のテーマでありませんから」と断ります。最近もテレビ討論《グルジア・ロシア紛争》への出演を請われたばかりですが、これは私の主題でないし気も進まない、と言つて断りました。

最後に言い残したことがあります。老人学研究者として日本について非常に興味があるのは、男女共に日本が世界一平均寿命の長い国であることです。私はまだその理由が理解できません。是非その研究も始めたいと思つています。長時間の厳しい労働条件で働き、都市住民の割合が圧倒的に高く、交通渋滞やスシツメ通勤で有名で、異常にストレスがたまりがちの人びとの寿命がなぜ長いのか。他方では動物蛋白の摂取比率が低位でそのかわり魚類を多く食べるのでコレステロールがたまらないのだ、とか、家族の絆がしっかりしているという人もいます。薬害や喫煙や医療制度さらには教育制度はどうか、いずれにしろ私はまだその回答を聞いたことがありません。老人学研究者としては日本をこれから的重要な研究対象としていかねばならないと思つております。

——博士ご夫妻の午睡を犠牲にされてまでのご協力に感謝いたします。もし時間に余裕があればもっとお話を伺いたいのですが、もう夕刻の六時を廻っています。これから博士が、恐縮にも私どもを近くの自家菜園に案内くださり、手作りの収穫物をおすそ分けいただけとおつしやすので、インタビューの方はこの辺で終了させていただきます。最後に、この一〇月に再度ロシアを旅行されるようですが、実り多い訪問となるよう切望します。

(一九九三年九月四日)

## インタビューを終えて

佐々木洋

メドベージェフ氏の自宅前にて 右は佐々木氏



科学者ジョレス・メドベージェフと歴史家ロイ・メドベージェフの双子の兄弟が、故サハロフ博士とならぶ旧ソ連反体制知識人の良心であつたことに読者も異存あるまい。ジョレスは、『リセンコ学説の興亡』や『ソルジエニーツインの闘い』、『ゴルバチョフ』、『チエルノブイリの遺産』などで、ロイのほうは『共産主義とは何か』や『社会主義的民主主義』、『二〇世紀のソ連』などで知られ、二人には『フルシチヨフ権力の時代』など何冊もの共著がある。彼らの反体制出版活動に手を焼いた当局は、ジョレスを精神病棟に拘禁したり、英國出張中の彼からソ連市民権を剥奪し、他方ではロイを失職させ、彼の兵糧を断つた。だがロンドンとモスクワとに分離された二人は、さまざまな制約にもかかわらず、相互の密接な協力のもとに全世界が注目する執筆活動を続けてきた。当局がジョレスの帰国を閉ざしたことで反対派は打撃を受けたが、そのことで逆に当局は、最も精悍な虎を野に放つ結果にもなった。外部からは容易に理解し難い、ソ連国内の政治的諸事変にたいする、精度の高い情報に基づく、複眼的視角からのジョレスの示唆によって、われわれはどれだけ足らざるところを補い、また無用な国際的リアクションがどれだけ未然に回避されてきたことか。

私がかねて着目してきたのは、そうしたジョレスが、旧ソ連の最大の悲劇と難問が農民問題にあり、彼の著書 *Soviet Agriculture* (Norton;1987) こそ自分の半生を賭けた仕事の集大成であると述べてきたことである。そして、ジョレスは何ゆえに、丸七年以上も費やして原著で四五〇ページに及ぶこの労作に挑んだのか、日本語版の翻訳予定者としては是が非でも著者の琴線に触れてみたい、というのが今回のインタビューの主目的であった。

博士を地下鉄終点ほど近い自宅に訪ねたのは去る九月四日午後である。博士はよくありふれた二軒長屋の、玄関脇のせいぜい八畳あるかないかの質素な畠舎の主人であった。始めに労作の翻訳上にかかる諸点を片づけ、ついで窓社や北海道大学図書刊行会などから託された要請について博士からそれぞれ快諾を得たのち、いよいよインタビューに移った。インタビューの途中、別室で奥様からお茶とケーキをご馳走になつたが、そこは送られてくる旧ソ連各地の紙誌の山からスクラップ・ブックを編纂する彼女の仕事場でもあった。会見の終了後は夫妻の自家菜園を訪れた。玉ねぎなどは日本からも種子を取り寄せているという。

会見記からもつかみとつてもらえると期待しているが、私の質問にたいして、博士はかねてから答を用意していたがごとく、まるで堰を切つたかのように、話を続けられ、正直いつて、どの場面でも次の話題に転換するのが困難なほどであった。特に、ロイとの間のコミュニケーション・リンクと、近年のソルジエニーツイン評については、博士は、よくぞ聞いてくれたといわんばかりに、いつきに語ってくれた。ロイ・リンクについては、「やはやシーケレットでもペーパナルでもない」と明言され、また、『収容所群島』の著者については、「あなたの会見主旨から外れるかもしれないが、もっと話したいことがある」とか「これはまだ私の著作では一度も書く機会がなかったことだが」といながら、本邦初公開ともいうべき貴重なお話を伺うことができたのである。

実はジョレスとロイとの独自回路の有無は窓社の西山社長から託された質問でもあつたが、西

山社長からはもう一つの重要な企画をも具体化できるように託されていた。それはジョレスとロイとの『公開往復書簡』の企画であつたが、ジョレスはこれに快諾したうえ、すでに彼が数回分の書簡の腹案を検討中であることを、読者各位に報告しておきたい。

脱稿・一九九三年一〇月一九日